

TOKIO MARINE TOPICS

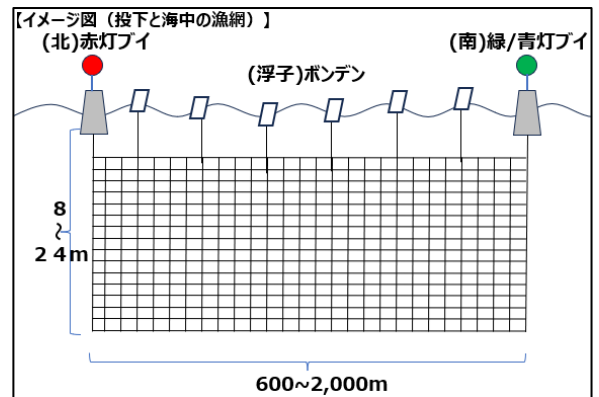
備讃瀬戸海域における“流刺し網漁業”の注意事項

(船舶：2026年3月)

備讃瀬戸海域にて沿岸部を除くほぼ全域で行われている“流刺し網漁業”の特徴を紹介すると共に、“流刺し網”に従事する漁船の近くを航行する際の注意点をご紹介いたします。

1. 流刺し網漁業の特徴¹

- ・ 流刺し網漁業とは魚の遊泳する場所を遮断するように帯状に縄を漂わせ、網目に絡ませ魚を獲る漁法を指します。備讃瀬戸では潮流が主に東西に流れており、網はこれに対して垂直に漂わせるため南北方向に入れられる傾向があります。
- ・ 地域や対象魚種によって網の長さ、丈、投網水深は様々です（長さは 600-2,000m、高さ 8-24m、海面から 1-15m、水面下に網の上辺がくるよう白や黄色等の「浮子」がつけられる）。
- ・ 流し網の端には燈火がつけられます（北は赤、南は緑）。



2. 備讃瀬戸海域における漁期・操業の時間帯²

サワラやマナガツオを捕らえる漁法として使用されることが多く、4月～11月の漁期の間で操業され、操業時間は長い時には18時から日の出まで行われることもあります。

サワラ：4月～7月、9月～11月

マナガツオ：6月～11月

3. 事故発生場所

魚がよく獲れる海域は年によって異なることがありますが、2025年は備讃瀬戸北航路出口付近で、商船と漁網の接触事故が多数発生しました³。



1,2 高松海上保安部 備讃瀬戸の安全通行のために(https://www.kaiho.mlit.go.jp/06kanku/takamatsu/d_safety_navigation/d_04anzen/d_4_01anzen/d_4_1_03/d_4_1_03.html)。

3 弊社にて受け付けた事故の発生場所(2025年4月～7月)

4. 航行における注意点

(1) 備讃瀬戸海上交通センターからの情報収集

備讃瀬戸海上交通センターでは、事前の航路通報を行う必要のない3,000トン未満の船舶に対しても、衝突、乗揚げを避けるために必要な情報を提供しています⁴。VHFを装備している船舶は、自船の安全運航のためにVHF(ch13やch16)を必ず聴守し、漁船の情報を得ながら航行することで航路や回避動作を前広に検討することが事故防止に有効と考えられます。

(2) 見張りの強化

現地海域に詳しい船舶海難事故の鑑定機関によると、備讃瀬戸は他船との複雑な針路交差が生じやすい海域でもあり、見張りを強化し、自船前方だけでなく、周囲の状況を常に把握し、余裕のある操船を心がけることが重要とのことです。特に、夜間は白や黄色等の「浮子」を視認することは極めて困難となるため、見張りの強化によって漁船や漁網の位置を前もって特定し、航路や回避動作を検討する必要があるとのことです。また、3月から7月初旬にかけては、短時間で局地的に濃霧が発生し、視界100m以下となることがあることについても要注意のようです。

(3) 漁船や漁網に対する大幅な回避動作

現地海域に詳しい鑑定機関からの情報に基づくと、漁船や漁網との接触を回避するためには特に以下の点に留意することが有効であるとのことです。

① 漁船は「見張りができる状況ではないかもしれない」「回避動作が制限される状況かもしれない」

漁船は、以下の特徴から、以下の特徴から見張りが十分にできない状況かもしれませんし、回避動作を取ることが制限されている状況かもしれません。こういったことを想像し、商船側が漁船や漁網を大幅に回避し航行することが事故防止に有効と考えられます。

- ・ 揚網後の漁獲物選別作業、漁具の手入作業で忙しい。
- ・ 投揚網中の漁船は、操船の自由が利きにくい。
- ・ 小型船は眼高が低く、視野が狭くなってしまうため、接近してくる船舶に気付きにくい。

② 海面から漁網までの距離が短い場合がある

「漁網の投網直後」、「揚網作業中の漁船付近」、「水深の浅い漁場」では、海面近くに漁網がある場合があるとのことです。喫水の深い船舶だけでなく、喫水の浅い船舶でも、安易に網の上を航行しないことが事故防止に有効と考えられます。

③ 海中の漁網は湾曲していることがある

漁網の両端にある燈火にも注視し、海中の網の状況をイメージすることが重要です。潮流や船舶の航走波の影響により、海中の漁網は、南北にまっすぐ伸びず、湾曲している場合もあるため、商船側が漁船から大幅に距離を取って航行することが事故防止に有効と考えられます。

